

地方紙報道の中国表象にみる「帝国意識」 －『福井新聞』の「満洲」「北支」特派員報道を事例に－

Imperialist Consciousness in the Representation of China by local newspaper －〈Manchuria〉 〈North China〉 special correspondent report by 《Fukui Shinbun》－

文学研究科社会学専攻修士課程修了

岩 佐 興 城

Koki Iwasa

〈目次〉

【序章】

第1節 問題関心

第2節 方法

第3節 章構成

【第1章】福井新聞と「満洲」「北支」との関わり

第1節 福井新聞の外国報道

第2節 満洲・中国との関わり

第3節 1930年代・40年代の『福井新聞』

【第2章】特派員：奥村記者の満洲従軍取材

第1節 概要

第2節 奥村秀雄記者の「北満」紀行

満洲へ向け出発/「北満」の部隊駐屯地にて/「匪賊討伐」に従軍/帰国および補足情報

第3節 小括

【第3章】特派員：永井記者の北支経済事情視察

第1節 概要

第2節 永井正四記者の「北支」紀行

「北支」へ向け出発 満洲国奉天へ/天津へ/北京、通州、張家口/再び天津へ/大連から帰
国へ/「蠶く夜の北京」風俗街の表象

第3節 「北支」経済情報

第4節 小括

【終章】

第1節 結論

第2節 課題と今後の展望

【参考文献一覧】

【翻刻】奥村記者を満洲へ派遣 吉田専務ら全社員が見送り（資料）

【翻刻】永井記者を経済視察のため北支へ派遣（資料）

【序章】

第1節 問題関心

昭和戦前期、1930年代という時期は、日本の帝国主義的進出が東アジア、特に中国に対して活発に行われた時代であった。1931年9月の柳条湖事件以降、関東軍が中国の東北地区「満洲」を制圧していき、翌32年に「満洲国」の建国を宣言。これに関連して行われた中国に対する「華北分離政策」と、1937年7月の盧溝橋事件をきっかけにした日中戦争の本格化をへて、同地域の北京で中華民国臨時政府が発足した。これらの地域は内外の日本人によってさまざまに想像され、表象されたⁱ。特に、当該地域に対する直接の体験（駐在・旅行・従軍など）を持たない日本「内地」の人たちは、マス・メディアや大衆文化（少年漫画・作家の紀行文・小説・観光案内など）にあふれる情報に触れることで、地域やその場所に暮らす人々に対するイメージを形作っていった。このような「満洲」や「北支」（あるいは「支那」）とメディアとの関りについては、いくつかの研究がある。たとえば文学に焦点を当てた研究では、日本人と中国人・漢民族を比較し、他者としての中国人を否定し、それによって自民族を肯定する点に注目したカルチュラル・スタディーズ的な研究がある。川村湊は、満洲に対する文学者の紀行、通俗案内書、社会調査においてその地域に暮らす人々に対して「満州人（漢民族）の『汚なさ』『悲惨さ』『不衛生』『悪臭』『不道德』『本能』を強制的に描き出すことによって、彼らを日本人よりも劣位、劣等になおこうという無意識的（意識的）な差別意識」があり、「自民族以外の人々を非人間的であると見做し、動物的で本能的な『土人』として見る」視線があったことに言及しているⁱⁱ。また、満洲や中国の他の地域について、憧れ、望む姿勢を内地の人々に抱かせるうえで、景観を描いたパンフレット、移民案内、旅行記、流行歌などが役割を果たしたとして、これらの内容に触れている研究もあるⁱⁱⁱ。その他に、「満洲」や中国の他の地域（特に満洲）において、日本が植民地的な統治に関与し、日本と満洲・中国との友好を強調する「日満親善」「日支親善」を推し進めるうえでメディアが果たした役割に注目した研究^{iv}、一次情報の発信者となるジャーナリストや作家、思想家などの個人に焦点を当てた研究もある^v。また、本州の日本海側「裏日本」と呼ばれていた地域において、日本海の対岸にある「満洲」や東アジアに対して広まっていた「対岸認識」に焦点を当てた研究もある^{vi}。特に「環日本海」という視点で、本稿で取り上げる福井県も含む「裏日本」地域の人々が満洲や中国他地域に対して抱いた認識については、芳井研一が詳細な研究を行っている。しかし、それらの研究では地域にあった「帝国意識」は所与のものとされており、より一歩住民に身近な点での対岸認識を検討する必要があるだろう^{vii}。

本論文では日本「内地」のそれぞれの地域に密着して事業を行う地方紙の外国報道、なかでも福井県の地方紙『福井新聞』の「満洲」「北支」に対する特派員の派遣と、彼らが執筆した記事の表現に注目する。地域に根差し、ローカルな話題に即しながら、同時に日本が帝国主義的な進出を行う場に記者を送って記事を発表するというこの状況を追うことで、福井県という地域の地方性・地域性と「帝国意識」が混ざり合う様子をみていきたい。

第2節 方法

最初に前提として、『福井新聞』や発行母体の福井新聞社の歴史、特に海外報道をとりまく環境について説明し、その上で1930年代に実施した「満洲」「北支」への特派員の派遣と、彼らが執筆した記事に着目し内容（記述）を分析する。前者は1936（昭和11）年の10月から11月にかけて、福井新聞社の奥村秀雄記者が満洲に派遣され、現地にて「匪賊討伐」にあたる陸軍部隊に従軍取材を行ったものであり、後者は1938（昭和13）年に永井正四記者が経済事情視察のため「北支」に派遣された際のものである。

第3節 章構成

第1章では『福井新聞』と福井新聞社の外国報道の概要と、本論文で報道内容を扱う「満洲」「北支」という地域といかなる関りを持っていたかを提示する。第2章では1936年の10月から11月にかけて「満洲」で陸軍の「匪賊討伐」取材のため当地域に派遣された奥村秀雄記者の取材行と記事内容を紹介し、文中の表現に着目する。奥村記者の記事全体からは「匪賊（共匪）が跳梁跋扈する冬の北満」の様子や、当地域やそこに住む人々と日本人との対比が行われている点を見ることができる。第3章では1938年の2月から3月にかけて、経済事情視察のため「北支」に派遣された永井正四記者の取材行を紹介し、その内容の分析を行う。永井記者の取材行は経済視察ということもあり、記者自身の体験による紀行文調の記事のほか、現地で入手した経済資料や取材対象者の語りによる情報もある。それらの記事内容には繊維を中心としたものが多く、当時、産業構造が極端に繊維産業に偏っていた福井県の事情を背景にしている点も窺い知ることができるため、福井県という地域が抱えていた産業事情にも注目する。

【第1章】福井新聞と「満洲」「北支」との関わり

第1節 福井新聞の外国報道

地方紙のようなメディアが国外の出来事を報道する場合、情報を通信社に依存することが多い。では、昭和戦前期における『福井新聞』の場合はどうであったか。本節では、当時の『福井新聞』の海外情報を取り巻く環境について、通信社との関係と自社独自の取材網の整備、取材の実施例という観点からみていく。

通信社との関係について『福井新聞百年史』によれば、福井新聞社は長期にわたり日本電報通信社（電通）から記事の配信を受けていたが、満洲事変以降に通信社との関係は大きく変化した。1936年に同盟通信社（同盟）が設立され、福井新聞社も加盟した。同盟は支局網、取材体制、通信インフラを急速に充実させていき、それは中国に関しても同様であった。また福井新聞社は海外支局を有していた。1928年に日本統治下朝鮮の京城に、1941年には満洲国の奉天に支局を開設している。ただ、支局の詳細については明らかになっていない。また、同社は本論文で取り扱うもの以外に、2回記者

を国外へ派遣している。1902（明治 35）年に福井県の敦賀港とロシア帝国のウラジオストクを結ぶ日本海航路に就航した船の初航海に記者が同乗したという記録があり、1915（大正 4）年の 9 月には、滝沢龍水記者が朝鮮の釜山で開催された新聞記者大会に参加するため派遣されている。

第2節 満洲・中国との関わり

福井県は日本海を挟んで満洲・中国と向き合っていたためか、中国大陸に対する関心は高かった。その中で 1930 年代という時期について見ると、満洲事変以降、満洲や中国の他地域での戦闘の経過や、当該地域に出征している兵士の様子、開拓移民の中の福井県出身者の暮らしぶり、福井県の工業の大半を占めていた繊維産業の市場としての展望など、多様な側面から関心を集めていた。『福井新聞』もこれに伴い、紙面には関連する情報が増え、また新聞社自身が満洲や中国に関する日本軍の戦いや経済情報を紹介する行事や講演会などを自ら開催、あるいは後援していった。このほか、満洲・中国経済に関する座談会・講演会・報告会を後援し、その模様は紙面に掲載された。

第3節 1930年代・40年代の『福井新聞』

1930 年代、40 年代はメディアをめぐる環境も厳しさを増し、まず新聞の発行に不可欠な用紙が統制品となったこと、報道内容に対する監督・取り締まりが強化される中で、地方紙は統合され急速に数を減らしていった。1935 年の段階で、福井県内には『福井新聞』以外にも多くの新聞が発行されていたが、1945 年までに全て統合された。戦争報道への需要の高まりと、「1 県 1 紙制」に向けた新聞統合により発行部数は増加したが、紙の統制の影響もありページ数は減少、大戦末期になると地域の話題も掲載されなくなり、同盟の戦争報道が大半を占めるようになっていた。41 年には「言論、出版、集会、結社等臨時取締法」「新聞紙等掲載制限令」など言論・出版を取り締まる法律が相次いで公布され、事前の検閲も細部に及ぶようになった。

【第2章】特派員：奥村記者の満州従軍取材

第1節 概要

1931 年 9 月 18 日、関東軍は柳条湖で南満州鉄道の線路を爆破、これを「暴戾なる支那軍隊」によるものとした関東軍は軍事行動を開始し、各都市を次々と占領。翌 32 年の 3 月 1 日に「満洲国」の建国が宣言された。9 月 15 日に満洲国の承認に関する日満議定書が締結されると、福井県内でも各方面で祝福の声が上がり、満洲に対する関心が一層深まることになったⁱⁱⁱ。これに呼応して、福井新聞社は新聞発行に際して「一面はじめ各面に内外の激動する政治情勢を刻々報道」することで『大阪朝日』などの中央紙に対抗した。その中で、1936 年に同社の奥村秀雄記者を特派することを決定し、9 月 30 日に社告が掲載された。

愈々秋季匪賊大討伐を敢行せんとしつつある秋、本社では郷土水野部隊の討匪の實情と一般將兵の艱難辛苦の模様および、その附属警備沿線の状況を具さに銃後の郷土民に伝へる爲、特に軍事方面に精通せる本社記者、奥村秀雄君を同地に派遣し郷土水野部隊に従属せしめ將兵と共に奥地深く危険を冒して従軍せしめることとなりました（以下略）^{ix}

奥村記者は満洲国の域内で「匪賊討伐」にあたる陸軍の水野部隊に従軍して取材を行った。水野部隊は福井県出身の將兵を多く抱えていたため、新聞社は特に報道に力を入れていたのである。本章では、奥村記者の執筆した記事を紹介し、厳寒の中で「匪賊が跳梁跋扈する北満」の様子が表象されていることを明らかにしていく。なお、奥村記者個人に関しては、郷土史家の杉本伊佐美が「家は武生市奥村眼科院。昭和十年に入社し十六年まで第一線で活躍し、同年『毎日新聞』福井支局に転社したが野球好きの熱血漢だった。戦後二十三、四年頃また若くして逝去した」と紹介している^x。

1936（昭和11）年10～11月

月日	朝夕/面	見出し/内容	場所
9.30		社告	
10.1	夕1	奥村従軍記者 勇躍・壯圖に 見送人で驛頭を埋む	福井
10.2	朝2	一路報道戦線へ 奥村記者進發 歡送の裡に満洲丸出帆	敦賀
10.3	夕2	敦賀から清津まで 冷雨の甲板に立てば 視野に入る半島の港 雨に滲む燈台の光 午前六時着＝奥村特派員發	清津 (朝鮮)
10.6	夕2	闇の鐵路をヒタ走り 水野部隊根據地へ 開通初日の國際列車感 〇〇〇にて 【奥村本社特派員發】 奥村特派員 愈々討匪前線へ 五日午後一面坡着	ハルビン 一面坡
10.8	朝3	水野部隊に駆け付け 緒顔の隊長と交歡 次で看護長告別式へ 【奥村本社特派員發】	一面坡
10.10	夕2	星空も凍る曉にちかく 待侘びた出勤命令だ 人馬枚を啣んで蕭然矣 〇〇〇にて 【奥村本社特派員發】	場所不明
10.12	朝3	べチカ燃ゆる兵舎に 假寐の夢をむすぶ あすの聖戦を偲びて 【奥村本社特派員發】	場所不明
10.15	朝2?	〔討匪オ一線を行く〕 北満の共匪が恐れる 水野部隊麾下の“曠原の黒馬” 勇猛果敢な中條○隊 二道河子にて 【奥村本社特派員發】	二道河子
10.16	夕1	水野部隊中條○隊の討匪行（乗馬歩兵隊の行進） 奥村本社特派員撮影	
10.16	夕2	〔討匪オ一線を行く〕 行軍廿里、更に敵影を見ず “曠原の黒馬”も脾肉の嘆 中條○隊の異名、生ける匪賊を走らす 〇〇〇にて 【奥村本社特派員發】	二道河子

10. 21	朝 3	岸○隊アフラン附近に 匪賊を潰走せしむ 死体三個、拳銃小銃を遺棄 防寒具を透す厳寒【奥村本社特派員發】	アフラン 一面坡
10. 21	夕 1	川崎部隊の精鋭 ○○○○へ従軍す 奥村特派員撮影	場所不明
10. 22	朝 1 (全面)	〔水野部隊討匪行寫眞特報〕★★奥村本社特派員撮影★★ 戦線二十里 中條○隊 〔寫眞説明〕右上から下の方へ ◇中條○隊の精鋭匪賊の山寨に火を放つて焼き拂ふ ◇戦ひは終へた、戦場に残る良民を集團部落へ移住させる ◇二道河子の屯營を出發せんと意氣軒昂する將兵 ◇吊水湖附近で露營の準備 左上から下へ ◇休憩中の中條舞台、本部左から二人目の中條部隊長其の左が屋代副官 ◇（圓形）雜林中に潰走した匪賊の探索 ◇中和鎮へ駒を進める中條部隊本部、馬上後方奥村記者 ◇山寨は全部焼き拂ひ無住宅地帯とする此處は密林地帯で張蓮科（共匪）の本部であつたが最も兇惡な匪賊であつた	
10. 22	朝 3	〔中條部隊討匪行記〕 早くも近づいた冬の氣配 北滿の曠野は荒涼 漫ろにしのぶ故郷の山河である 【奥村本社特派員發】 知りたいのは故國のたより 奥村特派員引張風	二道河子 中和鎮 吊水湖
10. 23	朝 3	〔中條部隊討匪行記〕 共匪に惨殺された 滿人の死骸が轉る 黙々として行く泥濘のみち 【奥村本社特派員發】	
10. 23	夕 1	強行軍に備ひて ○○○○にて 奥村特派員撮影	
10. 24	朝 3	勝木伍長以下僅か五名が 匪賊數十名と猛戦 勝太伍長は重傷、兵二名戦死 北越健児の意氣高し	一面坡
10. 24	朝 3	〔中條部隊討匪行記〕 突如行手に當つて 數發の銃聲轟く 一氣に堀を登つたが既に潰走 【奥村本社特派員發】	
10. 27	夕 3	◆北滿の曠野から◆ 心を込めた慰問袋に 目に浮ぶ故里の山河 四邊の静寂を破て響く鈴の音 まどろむ兵士の夢は 【奥村本社特派員發】 土屋軍曹戦死（奥村特派員發）	一面坡
11. 10	朝 3	◇水野部隊討匪行（一）黃塵濛々 トラック上に眠る 【奥村本社特派員發】	一面坡 ハルビン
11. 10	夕 2	◇水野部隊討匪行（二）滿軍擁護に 寒月の夜を出動す 【奥村本社特派員發】	

地方紙報道の中国表象にみる「帝国意識」

11. 12	朝 2	◇水野部隊討匪行（三）出動命令下り トラック五台に分乗 【奥村本社特派員發】	
11. 16	朝 5	◇討匪前線の日◇ 暗夜を衝いて出動し 部落の肅正檢索 【奥村本社特派員發】	
		以下は奥村記者の記事の可能性はあるが無署名であるもの	
10. 14	朝 3	【北滿から】 一握のパン粉で二週間位生きる 栗鼠の如うな匪賊	一面坡

（『福井新聞』記事 1936 年 10 月 1 日～11 月 16 日及び『福井新聞百年史』を基に筆者作成）

第 2 節 奥村秀雄記者の「北滿」紀行

満州へ向け出発

10 月 1 日、奥村記者は多くの関係者の見送りを受けて福井を出発し、同日午後には敦賀港より日満連絡船の満洲丸（北日本汽船）に乗り、朝鮮の清津に向かった。清津から国際列車で満洲国のハルビンへ向かい、4 日には到着した。清津到着時から記事は始めているが、このハルビン到着のあたりから「自動車をとばして〇〇本部へ我〇〇本口隊長以下口皇軍將士を訪問」「旅装を解く間もなく再び車中の人となつて目ざすは目的地郷土野木部隊精銳の根據地たる〇〇へ、身体のコンディションは上乘、はち切つた記者は勇躍〇〇〇へ、報道第一線へと出發だ、なほ〇〇〇着は午後四時ごろの豫定（〇〇〇にて）」というように、記者の張り切りぶりが伝わってくる一方、軍事機密に関わる部分（部隊名・地名）が塗りつぶされる等、検閲が入るようになった。5 日には水野部隊の駐屯地たる一面坡に向かい、部隊と合流した。その際に、水野部隊長からは「有難うよくこんな奥地まで来て戴けた將兵はどんなに感激するだらう郷土の皆様は貴紙を通じて一同は頗る元氣だ必ず御期待に添ふべく努力するを傳へて戴きたい」という慰労の言葉を受け、「隊に従軍してペンを持つものゝ幸福を感じ」従軍するにあたり決意を固めている。翌日午後 6 時からは水野部隊で奥村のための歓迎会が開かれ、これに参加。7 日は病死した水野部隊の看護兵の告別式に参加するため、二道河子に移動している。8 日朝刊および 12 日朝刊の記事からは、この二道河子にとどまって見聞きした水野部隊の戦いぶりや、この場所に暮らす人々の日常生活を観察する様子を見て取ることができる。

「北滿」の部隊駐屯地にて

奥村記者は一面坡や二道河子に滞在する中で、水野部隊やその麾下の部隊の「匪賊」討伐の情報を聞き、將兵たちと交流し、ときに町に出てその様子や市井の人々を観察するなどして過ごしていた。12 日の記事からその模様と、満洲に対する認識がどのようなものであったかを知ることができるようになる。一面坡か二道河子のどちらかは判別できないが、部隊の出動を見越し「出動前に豫備知識を得るため」街に出て観察している。「戦前から部隊本部附近は露人と邦人驛員の住宅地で落着いた靜かな通り」を通して町の中でも賑わいを見せる地帯へ行くと、現地の市井の人たちの様子が現れてくる。

冷たい風に吹きさらされながら満人の野菜物露店が辻々に客を待つてゐる内地で行ふ野菜物市場とはまた趣を異にしてをり彼虚此虚にぼつりぼつりと点在してゐる

×

煙草を吹かしながら冷たい風の中で別に客を呼ぶのではなく悠々としてゐる満人の姿には一抹の悲哀を感じさせるものがあつた 然し四五年前までの悲惨なそして安定のない生活、匪賊の襲撃によつて家も財産も、生命さへも保証できなかつた

長い長い過去の恐怖と不安な生活から救はれた今日の現状を思ふとき彼は皇軍に対し感謝と敬意を表し遙か彼方の空に□□とする部隊本部の日章旗を感激にみちた眼をもつてみつめるであらう無智でともすれば獐猛な野性を發揮する彼等がこゝまで従順になり滿洲國獨立に対し感謝を捧げるに救つたこれまでの過程を考へる時私はどの兵士に対しても深く感謝せざるを得ない（朝刊5面）

「満人」の市場の様子を観察しながら、日本軍が来る以前の「悲惨なそして安定のない生活」「匪賊の襲撃によつて家も財産も、生命さへも保証できなかつた」状況と、日本軍が来た後の状況を対比しており、さらに彼らのことを「無智でともすれば獐猛な野性を發揮する彼等」と記述し、「皇軍」の働きにより豊かさや安定を得たことを強調している。さらに、水野部隊などが行う「匪賊討伐」の意義について

内地の一般人は討伐とは匪賊と見られるものを□すの位位に考へてゐるかも知れないが皇軍の方針は決してそんな簡単な思慮ではない決して殺すのが最後の目的ではない、彼らをして滿□□□□の□□□□□せしめ不遇な生活から人間らしい生活へと導き満人の國で□までも満人の手をもつて把握し確保せしめやうとの遠大な思慮から出てゐるもので無智な満人大衆の啓蒙うん動に全力を傾注してゐる

と書き記しており、満洲での日本軍の行動があくまで「満人」の生活と彼らの自治を保障するという「遠大な思慮」によるものであるという点にも言及している。次いで15日（9日発）の記事では、一面坡から二道河子に移動した時の部隊の様子が描かれている。二道河子は後述する1回目の「討匪」で奥村が従軍することになる中條部隊が駐屯していた場所で、「この附近は孝鳳林、五龍、張蓮科等の匪賊が各所に潜伏してをり毎日二、三名から五名位ひが出没してゐる」という記述から、より戦場に近いところに来たことが窺ひ知れる。この記事における情報は、奥村自身の体験ではないが、附近に出没した「匪賊」と戦う兵士たちについて、「數度の遭遇戦に示した、將兵の勇猛果敢振りは流石に越前健児の名を恥かしめない」「北滿の共匪は中條○隊長を「曠原の黒馬」と呼んで恐れ黒馬の行く處忽ち潰走する嗚呼千里の曠原に日章旗を押して正義人道の爲めに降魔の利劍を奮ふ黒馬隊の勇士

よ！これが皆我々の郷土の青年であることが知るとき感激の血潮は沸き立つのだ」というように福井県出身者が取り上げられている。そこから日は経って 21 日の朝刊（20 日発）の記事は一面坡において書かれている。内容は 14 日から「匪賊討伐」に出た水野部隊の一隊が 16 日アフラニ附近を警戒中に「四十名からなる共匪」と遭遇し 1 時間にわたり交戦したというものである。この後 24 日朝刊、27 日夕刊にも水野部隊の「討匪」の様子が記されているが、ここでは部隊の兵士や、兵士達との交流の様子が中心となっている。

「匪賊討伐」に従軍

満洲滞在中、奥村記者は 3 回にわたり部隊の「匪賊」討伐や搜索の取材に当たっている。10 月 10 日から 12 日までの 1 回目では、水野部隊麾下の中條部隊の「討匪」に加わっている。この時の従軍取材の内容はまず、10 日朝に速報のような形で部隊出発時の様子に関して情報が発せられ、当日夕刊に紙面に掲載された（発信地点は伏せられている）。その後、16 日の夕刊（15 日発）と 22 日の朝刊にその詳細が記され、ここで地名や部隊の具体的な行動がある程度明かされている。10 日は午前 4 時に二道河子に駐屯する水野部隊に対し「匪賊掃蕩に出動の命令」が下り、記者も「外套ピストル等に身を固めて」出発することになった。午前 8 時に中條部隊は二道河子を出発し、「行手はるか茫漠たる北滿の曠野道なき道」を行軍していったが、この日「匪賊」が現れることはなかった。翌 11 日も行軍を続けたが、「二道河子から西北廿里行けども行けども殆んど目的の匪團は片影だに見せず」この日も「匪賊」に遭遇することはなかった。23 日朝刊の記事にはより詳細な内容が記されている。この日は曇りで、朝方に気温が氷点下 16 度になるほど寒く、さらに湿地帯を徒歩で進み、午後には豪雨にも見舞われている。そんな中、彼らは途中「吊水湖を出て約一里ばかり進んだ山岳地帯」で「共匪に惨殺された一滿人の死骸」を見ている^{xi}。この時の様子は「頭蓋骨脊椎が残つてをり帽子、帯衣が死骸附近に散乱し悲惨な情景は記者も思は目を反むけた」「肉塊は口禽（鷲、鷹の類）についばまれて骨格のみだが着衣の具合から見れば成程二週間位のものかと考へさせられ」た、と生々しく描かれている。12 日は雨が上がったものの引き続き「濕地に悩まされたが南へ南へと部隊は行軍をつづけていたが、行軍中に「数發の銃聲」が聞こえ、「匪賊」との間に戦闘が開始されたと思い、彼らがいる山寨に駆け付けたが、その時にはすでに「匪賊」は「潰走」していた。部隊はこの山寨にあった武器一式を押収した後、山寨を焼き払って行軍を再開した。その後頭嶺子というところの附近で再び銃声を聞き、馬を走らせたが、すでに「匪賊」は遠方に消えていった。そして、午後 6 時半に小嶺の駅に着き、列車で二道河子に移動。最初の「討匪」取材はここで終わりを迎えた。

11 月 1 日から 3 日までの 2 回目の取材では、同じく水野部隊に従軍して取材を行い、この時の詳細は 10 日の朝夕刊および 12 日の朝刊に掲載された。1 日、水野部隊は「討匪」に関して出撃し「本格的活動を期する」こととなり、部隊および奥村記者は午前 6 時 20 分に一面坡を出発し、ハルビンに向かった。ここの司令部からトラックに乗り込み、午後 2 時ごろに、作戦地域に向かった（作戦地

域名は伏せられている）。トラックは広野を走り続け、途中「日没の早い冬の日は早くも西山に傾きかけ荒涼たる冬の廣原に黄昏の霧が降りはじめた」中で「彼方此方の満人の軛屋から夕食の仕度くの紫煙が薄紫きに巻あが」る様子を見ながら、夕日が沈んだ頃に目的地の「伊藤部隊」に到着し、宿舎に入った。具体的な地名は明らかにされないが、奥村はこの地に関し、次のように述べている。

この地は非常に匪賊が多く又こゝに巢喰つてゐる匪賊はいづれも兇悪なる共匪の群で頑強に抵抗するといふ最も憎むべき奴らでこれに対し水野部隊は徹底的掃蕩を行はんとするもので相當の困難と犠牲が伴ふものと思はれる

翌2日は「討匪」を行う部隊の会議が開かれていたが、この日「満上店方面」に出動した満洲国軍が約80名の「匪賊」と遭遇し、午後3時から戦闘が発生していた。水野部隊はこの戦闘に加わるべく、午後6時20分に集結しトラックで戦地へと向かった。現場に向け「つめたい風、凍り付く様な星の光、月夜に見える沈黙の丘陵どことなく凄惨な氣が口方に漂つてゐる、銃身をもつ手は殆んど感覺を失つて来る、寒さは防寒具を通して身体にしみこんでくる」中をトラックは走り続け、約2時間で到着したが、この時も「匪賊」は「潰走」していたため、水野部隊の将兵たちは満洲国軍の負傷兵の輸送や手当てを行っている。なお、午前中に行われた日滿の軍事的な連携に関する水野部隊長と満洲国軍側との会見に関して、奥村は「友邦國滿洲のために働きつゝある皇軍が滿軍とがつしり手を組んで王道縣土建設へとまつし□□□□□□と□□には敬意を表せざるを得ない」とコメントを添えている（10日夕刊）。この日は夜になってからの出撃で、負傷者の輸送などを終えて部隊の駐屯地に引き上げたのは翌3日の午前3時となっている。わずか3時間の睡眠の後、3日は午前6時に起床、この日は明治天皇祭のため駐屯地の門には日章旗が掲げられていた。この様子に、奥村は「北滿の地においてそぞろに内地の祝典を思ひながら翻る旗をちツと見つめてゐると日本國民としての今後の執るべき態度についてあるものを□示させられて来る」との感想を抱いている（12日朝刊）。祭日ということだけあって、討伐部隊であり「一日だつて安々としてはをれない」中でも食事には酒が出るなど、気分は幾分和らいだ様子が見て取れる。しかし、やがて「出動準備」の伝令がかかったことから「兵舎内は俄然色めき立ち」、前夜の満洲国軍の戦闘のこともあり「全兵員の眉間には一抹の殺氣さへみなぎつてゐた」状態で、午後2時にトラックに分乗して出発した。しかし30分ほど走ったところで引揚げ途中の満洲国軍と会い、「匪賊」が既に逃走したことが分かったため、水野部隊も引き揚げることになった。

3回目は、11月8日の「部落肅正」に関して記事がある。7日は「別にこれといふ情報もなくしづかな一日をすごした」が、8日は同駐屯地にいた「伊藤部隊三好隊」が「東北方の部落を肅正」するために出撃し、奥村もこれに同行している。部隊は午前2時に起床し、明け方の「心身ともに凍りつく様な寒さ」の中を行軍して、やがて目的地の部落に到着すると、その家々に「匪賊」が潜んでいな

いか搜索が開始された。その内容は。

部屋に入ってから民家を一軒々々たゞき起して家内のものを檢べるこれは冬籠りの季となると匪賊の群の中にはよく自己の親戚を訪づれ冬越しをするがためこれを防止する搜索を行ふ

というもので、一部の部落に関しては「特に〇〇部落には匪賊が良民のような顔をして住まつてゐるものが多いのでその訊問も厳しく行ひ不審があれば直ちに搜索」を行っている。これらの搜索は、寒さ、路面の凍結、睡眠不足の中で行軍もはかどらない中で行われた。従軍する奥村も「自分で意識せずに機械的に足が動いてゐるだけだ、白々と夜が明けて來てから昇りつめた峠から口の晃口を見渡す茫漠たる北滿の雪景色は美しいといふよりもうら淋しく口惨な感がする、私はこの口火口な北滿の冬の姿を暫らく凝視し深い瞑想にふけつた」と書き記している。「匪賊」の搜索を続けているなかで、やがて「それ匪賊だ」「匪賊の監視兵」だと兵士たちが騒ぐ方向に「不審な滿人が明方の口票をさ迷つてゐる」姿を見た。この「滿人」は捕らえられ、通訳を介して訊問を受けたが「明け方早く次の部落へ牛を賣りに行き歸りだ」と答え、「匪賊」ではないということでそのまま解放された。奥村は彼が「匪賊」ではないことに落胆しつつも、「山を越え野を越え附近部落の肅正を行」う部隊に引き続き同行して午後２時半には兵舎に戻っている。

帰国および補足情報

奥村記者が帰国した正確な日時は判明していないが、社史によると彼は「五十日間にわたり在滿、感じたまま見たままを軍国調ながら健筆をふるい続けた」そうで、11月下旬までには帰国していたと考えられる^{xii}。

調査によって確認できた記事は、奥村記者が執筆したものが21回分、彼の行動を紹介する補足記事も含めると全部で24回分となったが、これらの記事は現地での出来事や奥村自身の体験と連動して順番に登場したわけではない。特に直接「討匪」に動向した時に見聞した情景や部隊の行動などは、1週間から10日ほど遅れて紙面に登場している。一方で、彼が経験して発した情報が、翌日の紙面に掲載されている場合もあり、内容の前後が激しい。さらに、軍に同行して前線に出ている間や移動中には記事の発送もままならない場合もあった。

第3節 小括

「五十日間にわたり在滿」し、記事を書き続けた奥村記者の記事からは、「匪賊が跳梁跋扈する北滿」の風景とともに、「滿人」といわれた現地で生活を営む人々の「後進性」や日本軍が来る以前の「悲惨な生活」が記され、日本軍との対比が行われた。そこには少しずつ福井県出身者のエピソードが混ぜられ、「郷土紙」の記者として彼らの「活躍」を描こうとする姿勢も見えて取ることが出来た。

【第3章】特派員：永井記者の北支経済事情視察

第1節 概要

本章では、『福井新聞』の「北支」への特派員の派遣と記者が執筆した記事内容を紹介する。福井新聞社は1938（昭和13）年の2月から3月にかけて、「北支」への経済視察のため同社所属の永井正四記者を特派員として派遣した。2月11日の出発当日の朝刊2面に掲載された社告にその目的が記されている。

〔北支経済現地視察〕永井特派視察員 十一日午後三時十五分出發 福井新聞社

北京新政権の成立以來、北支と本縣との經濟關係一層密接なるものに至つたと同時に關稅問題その他に關聯して相互の交渉錯綜し本縣としてはこの際現地調査の必要痛感さるゝに至つたので本社は卒先編輯局經濟部主任永井正四を特派し人絹織物の進出その他に關する視察調査にあたらしむることとなり同氏は來る二月十一日午後三時十五分福井驛發を以て出發するに決定した（寫眞は永井氏）

1937年7月7日に北京郊外の盧溝橋で日中の軍隊が衝突し、いわゆる日中戦争（当時の日本および本稿で取り扱う記事での呼称は「北支事変」）がはじまった。翌38年の12月には、中国の華北地区に「北京新政権」すなわち中華民国臨時政府が発足した。ここへ経済視察のため永井記者が派遣されることになったのだが、社告に示された「人絹織物の進出その他に關する視察調査」目的に關して、

「北支」に滞在した約1か月の間に、繊維産業に關する視察調査、関係者への聞き取りのほか、戦跡の訪問、商店街の見学、さらには風俗街の見学まで経験している。永井記者の取材は経済事情視察ということと、訪れた場所の治安がある程度安定していたことから、精力的に記事を執筆した。基本的に都市部を訪問したため「満洲の広野」のような情景は出てこないが、記述も緻密になり、その中にある「北支」「満洲」とその都市部、そしてそこに暮らし行き交う人々に対する表現にもより文量が割かれている。また繊維を主とした「北支」経済の全体を俯瞰するものとして、文書によって入手した情報をまとめ、提示した記事も数多くみられる。なお、これらの記事で紹介される「北支」とは「チヤハル、安遼、山西、山東の五省である」という。

永井記者個人については、地方紙の研究で「昭和のはじめ入社し経済部を担当、十六年に退社。しばらく『だるま屋』百貨店に勤めたが二十二年に『福井織物新聞』を発行。印刷設備も持ち業界紙として大いに発展している」と紹介されているように、一貫して経済・繊維に関わっていた人物であった^{xiii}。

地方紙報道の中国表象にみる「帝国意識」

1938（昭和13）年2～3月

月日	朝夕/面	見出し/内容	場所
2. 11	朝 2 (社告)	〔北支経済現地視察〕永井特派視察員 十一日午後三時十五分出發 福井新聞社	福井
2. 12	朝? 3	永井記者出發 北支経済視察の途に	福井
2. 18	夕 4	人絹一色の半島人 呉越同舟の三等船客の種々相 〔奉天にて〕永井正四	奉天（満州） 福井⇒下関⇒ 釜山⇒奉天
2. 19	夕 4	キング一冊八十銭 安東驛賣店のペラ棒な値段 〔奉天にて〕永井正四	奉天
2. 21	夕 4	支那の名物は洋車 一日の収入五十銭 〔北支にて〕永井正四	奉天
2. 22	夕 4	街を行く満人の衣服 八分までは人絹 〔北支にて〕永井正四	奉天
2. 23	夕 4	奉天から天津へ 陰気で汚い列車の二等室 〔北支にて〕永井正四	奉天⇒天津（山 海關/秦皇島/北 戴河/大沽 経 由）
2. 24	夕 4	北支の開港場天津 商取引はみな舊城内で行ふ 〔北支にて〕永井正四	天津
2. 25	夕 4	八割まで福井製品 ◇天津市内の織物小賣商店◇〔北支にて〕永井正四	天津
2. 26	夕 4	産業挺身隊の覺悟で 密輸親分を訪ふ 〔北支にて〕永井正四	天津
2. 27	朝 2	黎明の北支とは何んな所か（一） 特派員 永井正四 「北支五省とは河北・チャハル・安遼・山西・山東の五省である」	天津
2. 28	朝 2	黎明の北支とは何んな所か（二） 特派員 永井正四	
2. 28	夕 4	天津から北京へ 列車内のオンボロ一度十銭 〔北支にて〕永井正四	天津⇒北京
3. 1	朝 2	黎明の北支とは何んな所か（三） 特派員 永井正四	
3. 1	夕 4	三朝の古都北京 邦人の發展は極めて遅々 〔北支より〕永井正四	北京
3. 2	朝 2	黎明の北支とは何んな所か（四） 特派員 永井正四	
3. 2	夕 4	事變あと邦人が殺到 北京は凄い景氣 物價は殆ど内地より三割高 〔北支にて〕永井正四	北京
3. 3	朝 2	北支の貿易港天津（一） 特派員 永井正四	
3. 3	夕 4	北支の經濟事情 比較的自作農の多いが特徴 〔北支より〕永井正四	
3. 4	朝 2	北支の貿易港天津（二） 特派員 永井正四	
3. 4	夕 4	北支の經濟事情 農産物は小麦が尤も大きい 北支にて 永井正四	
3. 5	朝 2	北支の貿易港天津（三） 特派員 永井正四	
3. 5	夕 4	北支の經濟事情 家畜を持たぬ農家が過半数	
3. 6	朝 2	鄭人の働く時間は一日僅に四時間 〔北京より〕永井正四	北京
3. 7	朝 2	萬壽山から通州へ 榮華と悲愁の跡 北支にて 永井正四	北京/萬壽山/通 州
3. 7	夕 4	北支の經濟事情 牛肉の移輸出は將來性あり 〔北支にて〕永井正四	
3. 8	朝 2	掠奪品の分前から 仲間同志が争ふ 通州事件の追憶 永井正四	通州

3.8	夕4	北支の経済事情 日本紡績の天津進出一頓座 [北支にて]永井正四	
3.9	朝2	惨殺体を捨てた所に 未だ女の髪の毛 通州事件の跡を訪ふ 永井正四	通州
3.9	夕4	北支の経済事情 織産設備は急激に擴張さる [北支にて]永井正四	
3.10	朝2	張家口商店打診 途中で敗残兵貨車爆破の跡 [北支にて]永井正四	北京⇒張家口
3.10	夕4	北支の経済事情 比較的發達した毛織物工業 [北支にて]永井正四	
3.11	朝2	北京の街至る所に 支那娘が目につく [北支にて]永井正四	北京
3.11	夕4	北支の経済事情 石炭は山西省で全支の半分 [北支にて]永井正四	
3.12	朝2	使命を果し 永井記者歸福 (永井記者福井に戻る)	福井
3.12	朝2	天津から大連へ 濃霧のため船は二度停船 [北支にて]永井正四	天津⇒大連
3.12	夕4	北支の経済事情 製鐵、アルミニウム、採金、石油 [北支にて]永井正四	
3.13	朝2	滿鐵は大連の滿鐵から 福井の滿鐵かを疑ふ [大連より]永井正四	大連
3.13	朝3	[蠡めく夜の北京] 細胞的に伸び行く 賭博と情痴の巢窟 闇に躍る哀れな北京の女性 [永井特派員視察員記]	北京
3.14	朝2	大連から神戸へ 滿鐵の中西理事に會見懇談 [北支行]永井正四	大連
3.14	朝3	[蠡めく夜の北京] 倫落の魔窟に喘ぐ 可憐な十二の娘 これも蔣介石暴政の犠牲 [永井特派員視察員記]	北京
3.15	朝3	[蠡めく夜の北京] 胡弓の哀調に偲ぶ 夜の支那廓情緒 耳にのこる車夫の囁き聲 [永井特派員視察員記]	北京
		この後、永井記者は各地の巡回座談会、報告会に出席し、視察調査の内容を語って歩いた。これらの座談会および報告会では、満州・北支に関連する人物がほかにも多く登場している。『福井新聞』では、これらの内容を「北支の経済を語る」「北支の織物を探る」などのタイトルで複数回掲載している。	

(『福井新聞』記事 1938年2月11日～3月15日及び『福井新聞百年史』を基に筆者作成)

第2節 永井正四記者の「北支」紀行

「北支」へ向け出発 満洲国奉天へ

永井記者は2月11日に大々的に見送りを受けて福井を出発。山口県の下関まで行き、連絡船興安丸で朝鮮の釜山に渡った。12日夜には釜山に到着し、夜行列車に乗り朝鮮半島を北上し、13日夜には満洲国の奉天に到着した。21日夕刊には、奉天の町の情景が、町の成り立ちや日露戦争時の歴史も関連して「豪壮なる洋館、城外の喇嘛塔兵工廠の煙突など、さすがに元明清諸時代から今もなほ満洲一の盛都として誇るに足るそれは堂々たる街歡である」と書いている一方で、「商店の陳列窓の棚に腰を下して煙草をふかしながら出張つてゐる怪しげな支那婦人はさかんに苦力を相手に白□を賣つてゐるこの大道で姿には哀れさを感じ」たり、「支那の名物としては洋車、馬車、賣春婦等であるら

しい」「（洋車の車夫の 1 日の収入が 1 日 30 錢であることに）その金で生活をしてゐるのだから程度は非常に低い」という「満人」「支那人」評が見られる。一方で、「しかし奉天の街をどこへ行つても日本人には満人たちは非常に敬意を表してゐる」「満洲軍隊の美しい心には全く感激した」ということで、日本人と「満人」との対比が行われている。15 日からは経済視察が本格的に始まっている。中でも繊維関連の記述は一気に増え、15 日は奉天商工会議所の訪問、商店街の見学、福井合同運送の関係者との会食、満洲日日新聞社の訪問^{xv}、染色工場の見学と続いているなかで、町の風景を見て「満人の衣服につき一人々々を見て行くが、満人の八分まで人絹織物で作つた旗袍や小□（もゝひき）をはいてをつた。よくもこれまでに人絹織物が普及したものだなと思ふと感慨深いものがあつた」、「商店街の大きな百貨店式の店へちつと入つて見たか人絹織物を取り扱つてゐる店は五軒もあるその店には相當お客かはいつてゐる此この光景を見て大いに意を強ふした」、さらに染色工場を見学した際には「同工場には福井品の生地パレスと縮緬が約三百反程工場に積んであつたので心強く思つてその製織者の登録番號までも寫して歸つた登録番號はパレスは E 一〇で縮緬は E の四一番であつたが早くこの製織品だか知りたかつた」と繊維業に関する永井記者の関心と知識が現れている。

天津へ

この後、満洲国奉天から中華民國臨時政府統治下の天津へと移動。午後 2 時半以降に天津に到着、「どこの驛の乗降客の支那人をみても女も男も人絹織物を身につけてをらぬものはない」状況に「意を強ふ」している。17 日には天津にある武斉洋行の訪問、天津日本領事館の訪問を行い、天津の市場や中華民國臨時政府の関税問題に関して懇談を行った。18 日は天津日本商工会議所、美豊洋行の訪問、天津市切つての有名な絹織物商店を訪問。さらに、相次いで商工省貿易幹旋所、染工場、人絹機業工場、織物商店街を訪問^{xv}。特に後者に関しては「支那の染工場としては堂々たるものであつた」工場で中国人の主人と会っているが、彼は記者たち一向に対し「相當味のある意見を吐き日支親善を心から要望し」、そのうえで「戦争はコリコリだ、幾ら財が出来ても戦争のためになくなつてしまふ、今後は日本と仲よくいたそませう」と訴えている。翌 19 日は織物商人のふりをして「産業挺身隊の覚悟」をもって「密輸の大親分」を複数訪問している。彼等「密輸の大親分」とは問題なく話をする事が出来たが、最後に「今日お話したことは兄弟にもいはぬことだから、他人に洩らさないで下さい」と念を押されている。

北京、通州、張家口

20 日には一行は北京へと向かった。翌 21 日は、一行は二手に分かれて経済視察に出た。永井記者はこの日北京日本大使館、満洲日日新聞社北京支社を訪問し、途中で北京市内の東安市場に立ち寄っている。22 日には満鉄の北支事務局調査課、三井物産株式会社福北京支社を訪問し、その後市内の織物街を一巡、夜は再び東安市場に行き夕食を取った。23 日は正金銀行北京支店、中日実業協会等を訪

問した。24日は北京中心部を離れ、萬壽山、通州を訪れている。萬壽山は清王朝時代からの北京の名所旧跡で、3月6日、7日の紙面には萬壽山の歴史や建物に関する紹介がなされている。その後一行は通州に向かい、日本警察署通州分署を訪問した。この場所は前年の1937年に、いわゆる「通州事件」が起こった地である。この事件は、当時この地を統治していた冀東防共自治政府の保安隊（中国人で構成）が約200名の日本人の軍人や居留民を殺害した事件である。永井記者ら一行は、日本人が殺害された現場を見学し、また事件当時辛くも難を逃れた人から当時の話を聞くなかで「この光景を目のあたりにしのび、憎き奴保安隊の野郎と恨の血を沸かし皆は昂奮してしま」い、事件に関わった「保安隊」の遺体が遺棄されていた場所へと移動した際に、永井記者は「一行も保安隊には恨み骨髓に達してゐるので、少しも恐れず昂奮してを□□記者も思はず知らず、奴らの髑髏を踏みにじく」ることで「心ばかりの恨みを晴ら」すという行為におよんでいる。翌25日には奉天から合流してきた小泉、金井らが一足先に天津に戻ったため「北支」経済視察は再び福井商工会議所の小林主任と永井記者の2名で行うことになった。26日、永井記者ら一行は張家口に向かった。記事によると、張家口はモンゴル方面との貿易において重要な町であり、また「チヤハル省の省城、察南自治政府の所在地であると同時に、北京以北における最大の商業都市であり、軍事上の要地でも」あり、ここで一行は引き続き商店街に行き、見学と繊維商店の訪問を行った。

再び天津へ/大連から帰国へ

28日、一行は「清朝時代をしのばれるゆかしい古雅な古都、北京に一週間をすごしおもひ出の數々を残して廿八日北京におさらばをつけ再び天津に向」った。北京を離れるにあたり印象に残った出来事が紹介されている。

傳統を□つて、支那娘は大陸的色彩があつて、美人が多い、その美しいのは民族に比して特異性を持つてゐるらしい、北京の街を歩いても、バスに乗つても電車に乗つても汽車に乗つても美しい支那娘が一番に目につく顔も奇麗で背もすらりとしてをり、その姿が實にやさしく見えるその姿を見ると恍惚とならざるを得ない、その美しい支那娘に幾度となく會つた、ところで或る日のことであつた、支那一流の呉服店へ行つたところがその店に素晴らしい美人の支那娘ををつた余り奇麗なのにその姿にみとれてをつたところがその娘は店内の眞ン中で、つまみ鼻をされたのでこれには全く呆れて開いた口も塞がらなかつたその娘も相當上流階級の娘であつたらしかつたが全くおどろいてしまつた、後できいて見るとつまみ鼻は支那人の風習でどんな貴婦人であらうがお嬢さんであらうが所かまはず平氣にやられるらしい、それを見てをつたがそのやり方がナカナカ上手なもので最初左方の鼻をおさへて鼻を出し次に右の鼻を出した後でハンカチでふくのである

だが商人や職人、人力車夫等がつまみ鼻をしたあとは手や袖でなでておく者が多い、いかに慣習といへ上流の美人娘から街の眞ン中で平氣につまみ鼻をみせつけられてはたまつたものではないその美

人も一度に嫌になつてしまふ、ナカナカ面白い國だ。

(中略)

人力車夫は北京ではヤンチョーと呼び天津ではチヨビーと呼ばれてゐるその車夫は北京には約二万人もをるらしい、だから何處の小路に入つても車夫はウヨウヨしてゐる一番に多く群つてゐるのは驛附近であるが、その他目口の場所やホテル、大商店街の玄關も多く頑張つてゐる、その連中の大部分は別に住むに家なく、夜に口について車台を住家としてゐるらしい

夜なども凍りつく寒さも平氣で車台に眠つてゐるのだから實はのんびりしたものである、その連中の姿とては、内地の乞食よりも、みすばらしい姿で、満足な着物を着てゐる者は一人もゐない、皆やぶれぼろぼろの汚い着物を着てゐる、初めて人力車に乗つた時などは車夫が着てゐる垢に汚れてボロボロになつた上衣を脱ぎ足元へ置くので、この汚い服からシラミか南京虫でも出て來ないかと思つてヒヤヒヤしたが慣れると平氣になつてしまふ、しかしこの連中は頭が悪いので車に乗つてから計算が面白いのである安く乗らうと思つたならば銅貨を澤山やると非常に喜ぶ銀貨や貨幣の見分が出來ないらしい口つた紙幣などをやると車夫連中は口を集めてひねつてゐるところは實に滑稽なものである計算が出來ないらしい一里程も走らせて十錢でよいのだから實に安いものである何しろその連中は一日に廿錢で生活が出来るのだから手間賃も安い譯である、このごろは日本人は多くの料金をやるから日本人を非常に歓迎する生活の程度が低いだけにその車夫の顔をみても一人として人間らしい氣色をしてゐるものは一人もない皆な榮養不良なものである

然し鈍感な車夫でも氣を許されないのである夜等は遅くまで驛附近や旅館附近にがん張つてをつて道行く日本人を捉へては「ヤンチョーでピー行かう」と日本語まじりで呼びかけるゝとが口しい「ヤンチョーでピー行かう」といふ言葉は人力車で支那女郎部屋へ行かうといふのである

ある人の話であるが日本人で支那語が判らぬ男がこのヤンチョーの言葉によつて車に乗つたところが其日本人が支那語が使へぬので田舎ものとして見てピーへ行かず或處へ連れて行きそこに大勢の支那人が群つてをつて其日本人の有金から衣類品をまき揚げて放り出したといふ事實があるので迂闊にこの車夫の甘言に乗られないのである。(3月11日朝刊)

記事に登場する人力車夫(ヤンチョー)と風俗との関係は、この後の連載「蠢く夜の北京」にも登場している。28日から少し経つて3月3日の午前7時半には天津港から汽船北京丸に乗り大連へと向かった。2日後の3月5日には朝から大連市内にある南満州鐵道株式会社の本社を訪問し、その中で福井県出身の中西敏達理事とも会見をしている。中西理事の招きにより、大和ホテルで晩餐会が催され、福井県出身者が呼び集められて「郷土の想出話しに時の過ぎるも忘れてしまつた」という。

「蠢く夜の北京」風俗街の表象

ところで、永井記者の移動した道のりを辿っていくなかで、3月11日の朝刊にて人力車夫が「ピー

（女郎部屋）行かう」と呼びかけていたのはすでに紹介した。これに関連して3月13、14、15日の朝刊3面に、記者が北京の裏街道を訪れた時の模様が記述されている。その目的は以下の通りである。

暴辰極まる支那軍閥に虐げられてをつた北京支那人達も我皇軍の温い手によつて治安が守られ、中國臨時政府は誕生し軍閥の囚りこになつてをつた支那住民も漸くこの苦界から解放されて、新しい政府の力に守られて行くことが出来るやうになつたので、北京の支那人達は戦争のことなぞケロリと忘れてしまつてもう、青い灯、赤い灯の享樂の巷を追ひ歩く様になつた、何處の享樂街を見ても、のんびりした、支那人達がウヨウヨしてゐる、支那軍閥のために徴發されたといへども若い青年もをれば、壮年もをる、老人もをる、街は、男、女で織り交はされてゐる、この北京の裏街道を記者はちよいとのぞいて廻つた、（13日朝刊）

記事における表現もこれまでになく生々しいものとなっており、それらの「魔窟」とその場に身を置く女性たち、彼女達と永井記者との交流など、3回ともに文量を割いて描かれている。特に、14日の記事では「魔窟」近くにある女学校の学生（と思われる女性たち）がその場所で働いている場面があり、彼女たちと会った永井記者は「友邦支那女性たちのために一掬の同情の涙が禁じ得ない。かうした神聖であるべき学校の寄宿舎が魔窟と化し人肉の市場となつて可憐な女學生がはべり公然と人肉が賣買されてゐるとは拓け行く文明時代を口徨ふ、廢墟の支那國でなくては見られぬ存在であらう」と思い、「日本へ來ないかと歸化をすゝめる」と、彼女たちは「歡びながら日本語交りで『私日本好き、行きます』と答へ」この様子に「お前達よ今に日本皇軍の慈悲で日本人のやうな王道樂土を築かれ永遠の幸福の彼方へ連れて行くだらうと、その日を待てよ必ずその日が来る」と「力強く心に叫ん」でいる。

第3節 「北支」経済情報

紀行文調の記事と共に記事において重要な位置を占めるのは、「黎明の北支とは何んな所か」「北支の貿易港天津」「北支の経済事情」と見出しにある「北支」の経済情報である。ここでは、「北支」を構成する各地域の人口、在留邦人数、港の出入船舶数、石炭の採掘量など資源開発の状態、貿易総額、港湾のつくりなど、内容は多岐にわたっている。その端緒となる文章をここに提示する。

黎明の北支とは何んな所か（一）

黎明は北支の心臓部たる國際都市天津に赴き戰塵のうちにあわただしく翻つた五色旗は陽春にはえてさんとして照り興隆し來る万民甦生の自力と皇軍の威武は如何なる障礙をも撃破せずばやまざるの概がある、すでに臨時政府は海關接收をはじめ部内の擴充、冀東防共自治政府の合流折衝等着々進み宣撫工作としては新民會なる強固な支持大衆團體の生誕を見漸次河南、山東山西各省の新政權謳歌

の具体的表示があるなど新支那政權の動向を益々鞏固ならしめ東亞共存共榮の大施をかざす日滿經濟ブロックの行進曲も奏でられ明朗北支へ—この明朗北支とは何んな所か——（中略）北支五省とはチヤハル、安遼、山西、山東の五省であるその概要をのべれば左の如し（傍線部筆者加筆）

ここでは北京における中華民國臨時政府の設立が契機であると述べられているが、それまでも滿洲事変、華北分離工作、日中戦争の勃発・進展、冀東政權の設立など、「北支」を巡る政治状況は目まぐるしく移り変わっており、これらの変化が、日本、そして福井県の経済のいかなる影響を与えるかを探るべく、詳細な記述がなされている。紀行文調の記事では、市井の人々が人絹織物の衣服を身に着けている様子や各種繊維工場、織物商店などを訪問した様子が描かれているが、繊維以外にも、「北支」の農業・工業を巡る状況や、鉄、石炭、塩（工業用含む）など資源に関する情報も数多く掲載されている。しかし、やはり注目すべきは繊維に関する情報であろう。繊維とりわけ人絹（レーヨン）は、当時の福井県における工業の大部分を占め、人々の生活そのものに綿密に関係していた^{xvi}。また人絹織物をとりまく政治・経済上の環境も内外ともに激しく変化していた時期でもあり、このことから「北支」や滿洲は重視されていた^{xvii}。ただし中国全体に対しては、日中戦争の勃発によりそれまでの中華民國向けの輸出が途絶し、その他のアジア市場でも中国人商人によるボイコットが起こり、相場が下落するなどの影響が生じていた点に留意する必要がある。このような状況から、繊維産業については特に文量を割いて記述されている。

また、記述の大部分が都市の紹介で占められている記事もある。特派員として1か月余り経済事情視察に出ている永井記者は、奉天、天津、北京、張家口、大連の各地で経済調査、視察を行った。その中で2月24日夕刊4面の記事では天津、3月1日の夕刊4面の記事では北京、3月10日の朝刊2面の記事では張家口、3月13日の朝刊2面の記事では大連について、それぞれ町の概略（歴史、産業、福井との関連）が説明されている。

第4節 小括

以上、特派員永井記者の「北支」経済視察について紹介してきた。織物産業を中心とした経済視察が主目的であり、滿洲に派遣された奥村記者のように「匪賊の跳梁跋扈する冬の北滿」の風景の中を旅したわけではなく、軍隊を背景に取材を行ったわけでもない。しかしながら、記事の数およびその分量は多く、「北支」各地の街並み、名所旧跡から、そこで生活を営む人々の姿まで事細かに記している。ただ、その中で「支那人」に対する永井記者の評価はほぼ一定していた。それはあたかも、サイドが『オリエンタリズム』において、西洋が自分たちにとって好ましくない性質を東洋に対して執拗に貼り付けようとしたことに言及しているように^{xviii}、中国の人々に対する「後進性」「奇矯性」「官能性」「受動性」などを「発見」し、自らのアイデンティティを確保しようとしたことにもつながるだろう。ただ、とりわけ繊維に関連する綿密な経済情報は、そのようなイメージをはらみつつも、

当時の福井県に暮らす人々にとっては生活に十分関わりうる情報であった。

【終章】

第1節 結論

上記3章に渡る分析を経て、地域に密着した記事を書き、福井県という地域に根差して報道を行う『福井新聞』の報道には、地方性・地域性が反映されているが、その表象の根底には「帝国意識」が内包されていたことが明らかになった。「満洲」「北支」という地域の表象や、そこに住む「満人」「支那人」の後進性を発見することで、日本人としての自者肯定が行われた。福井県出身者や大陸と福井県を結び付ける内容もあったが、そこにある福井県要素・県民意識のようなものは、あくまで大日本帝国という国家に仮託してのものであった。ただし、その中でも、永井記者の「北支」経済視察における記述のように、繊維産業という福井県の人々の生活そのものに関係する情報と現地の表象が結びつけられるなど、より生活の身近な所に即して記事が書かれていたという点も付け加えておく必要があるだろう。

第2節 課題と今後の展望

本論文においては『大阪朝日』『大阪毎日』『新愛知新聞』など中央紙や大手の地方紙についての検討を行わなかったため、メディア全体における中国（「満洲」「北支」）の表象を分析することは出来なかった。さらに『福井新聞』は福井県の「郷土紙」を自認し、福井県内に支局網、取材網を張り巡らせていたが、福井県内の抱える事情は少しずつ異なっているし、世代や立場によって外地に関するイメージは異なる。例えば、港湾都市であり日常的に「外国人」を見る機会の多い敦賀市と、木の芽峠を隔てた福井市とは違うかもしれない^{xix}。また、商業学校の生徒などに対して、「満洲」やそれ以前は極東ロシアなどを巡る修学旅行が設定されていたということもある。このような、「帝国意識」を抱き、他者を見る「福井県民」あるいは「福井県の人々」という主体も実に多様であるということを認識したうえで角度を変えて研究を行えば、また「帝国意識」の内容も地域の中だけでも相当変わってくるのではないだろうか。また、現代においても、日本国内にあふれる中国情報にも、偏見に基づくものは残っており、歴史認識問題や国際政治情勢の変化、経済情勢の変化、二国間の政治関係の緊張によって「帝国意識」様のものは再生産される可能性もある。この点から見ても、地方紙の特派員報道という細かな分野の分析ではあるが、現代においても一定の意味を持つのではないだろうか。

【翻刻】奥村記者を満州へ派遣 吉田専務ら全社員が見送り（資料）

【翻刻】永井記者を経済視察のため北支へ派遣（資料）

今回、本稿を執筆するにあたり、奥村・永井両名が執筆した記事と、福井新聞社側で書かれた補足の記事（彼らの出発・帰還・現地到着を伝える記事）の翻刻を行った。翻刻は、修士論文の提出時、参考文献一覧の提示後に掲載した

【参考文献一覧】

- 尹東燦『「満洲」文学の研究』明石書店，2010 年
- 川村湊『文学から見る「満洲」「五族協和」の夢と現実』吉川弘文館，1998 年
- 北川勝彦/平田雅博〔編〕『帝国意識の解剖学』世界思想社，1999 年
- 杉本伊佐美『福井県の新開史』フェニックス出版，1979 年
- 竹中克行〔編著〕『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房，2015 年
- 本橋哲也『ポストコロニアリズム』岩波新書，2005 年
- 山室信一『キメラ―満洲国の肖像 増補版』中公新書，2004 年
- 芳井研一『環日本海地域社会の変容-「満蒙」「間島」と「裏日本」』青木書店，2000 年
- 『福井県史 通史編 6 近現代（二）』福井県，1996 年
- 『福井県史 資料編 17 統計』福井県，1993 年
- 『図説福井県史 近現代』福井県，1998 年
- 『福井を伝えて一世紀 福井新聞百年史』福井新聞社，2000 年
- 『福井を伝えて一世紀 福井新聞百年史 資料・年表』福井新聞社，2000 年
- 財団法人通信社史刊行会〔編〕『通信社史』財団法人通信社史刊行会，1958 年

【翻刻】奥村記者を満州へ派遣 吉田専務ら全社員が見送り（資料）

【翻刻】永井記者を経済視察のため北支へ派遣（資料）

ⁱ 山崎孝史によれば、「空間や場所といった地理的な現象をめぐって政治が繰り広げられるときに、その空間や場所はさまざまに想像され、表象される。『想像』とは政治に関わる当事者（たち）が自らの意図や理想にそって空間や場所を思い描くことであり、『表象』とは想像された空間や場所を言葉や画像などで表現すること」である。山崎孝史「地政言説から政治を読む」竹中克行〔編著〕『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房，2015 年 123 頁

ⁱⁱ 川村湊「大衆オリエンタリズムとアジア認識」大江志乃夫ほか〔編〕『岩波講座 近代日本と植民地 7 文化の中の植民地』岩波書店，1996 年 121-136 頁

ⁱⁱⁱ 山室信一『キメラ―満洲国の肖像 増補版』中公新書，2004 年など

^{iv} 川村湊『文学から見る「満洲」「五族協和」の夢と現実』吉川弘文館，1998 年、尹東燦『「満洲」文学の研究』明石書店，2010 年など

^v 例えば、日本人で「中国通」として知られた橘樸に関する研究（李彩華「橘樸のアジア主義」『年報

日本思想史』2010年3月 1-13頁）や、日中戦争中の中国を旅した小林秀雄の紀行文に注目した研究（陸艶「小林秀雄『蘇州』をめぐる」『佛教大学大学院紀要』第40号 2012年3月 203-212頁）などがある。

vi 芳井研一〔2000〕、古厩忠夫〔1997〕、橋本哲哉〔2001〕など

vii 芳井研一『環日本海地域社会の変容-「満蒙」「間島」と「裏日本」』青木書店、2000年 10頁、304頁、310頁など

viii 「満洲事変」から「満洲国」建国に至る歴史のあらましは前掲『キメラ 満洲国の肖像』を、福井県内での反応に関しては前掲『福井県の百年』を基に執筆した。

ix 前掲『福井新聞百年史』385頁

x 杉本伊佐美『福井県の新聞史』フェニックス出版、1979年 100頁 なお著者の杉本は福井県生まれ、1930年に『新愛知新聞』福井支局に入社、翌年8月に静岡支局に転じて37年10月に帰郷後『毎日新聞』福井支局に勤務した（同書）

xi 「共匪」とは、中国共産党指導のもとで活動したゲリラを指す。奥村の執筆した記事では「共匪」「匪賊」の用語が度々登場する。

xii 前掲『福井新聞百年史』387頁

xiii 前掲『福井県の新聞史』94頁

xiv 満洲日日新聞社では、明治43年から大正元年まで福井新聞社に記者として勤務していた橋本喜代治と会談している。『福井県の新聞紙』88頁 ただし、会談した際の話の内容に関しては記述がない。永井記者は「北支」において多くの人と会見しているが、多くの部分で「種々意見を交わした」などの記述にとどまっている。

xvi たとえば、1937年の福井県における農業・工業を合わせた「生産物総価格」2億5,116万円のうち、織物はその67%を占めていた（『福井県の歴史』291頁並びに『福井県史』資料編17）。また、翌38年の織物産業に携わる職工は県の総人口64万人余りの中、4万2,566人に上る（これ以外の関連産業〔織機・紡績機など機械工業・問屋など〕の人数も含めると、その数はさらに増える）。織物産地としての福井県は、一定数の大規模機業、中枢をなす機業台数20~50台の中小機業、そして農業兼営的な広範な零細企業といった規模の多様性を内包していた（木村亮「福井人絹織物産地の確立過程」『福井県文書館紀要2』福井県文書館、2005年3月）

xvii 福井県産の人絹織物は国外に輸出するにあたっては為替や関税の影響を受けた。低価格な人絹は円安もあって低価格で輸出されたが、1930年代前半に輸出先のイギリス領インドやオーストラリアが関税を上げるなどの貿易障壁を設け、36年にはオーストラリアとの日豪通商交渉が決裂し、当地域向け輸出に陰りが生じていた。そのため、朝鮮

満洲、さらには「北支」の市場が重視されるようになる（同上「福井県人絹織物産地の確立過程」並びに白木沢旭児「戦前期人絹織物業の市場構造と統制-福井産地を中心に」『社会経済史学』64巻2号 社会経済史学会、1998年 191-219頁）

xviii 本橋哲也『ポストコロニアリズム』岩波新書、2005年 115-121頁

xix 敦賀と「満洲」「北支」についてみる場合は、敦賀港と朝鮮・満洲を結ぶ日本海横断航路との関連に言及しなければならない。しかしながら、資料収集を行う中で、『福井新聞』においてはその記述は少ないように思われた。